小規模自治体における自治会を中心に展開される住民主体のまちづくり

- 沖縄県北中城村大城地区を事例として -

A study on residents-led community building developed by the residents' association in the small municipality

- A case study of Ogusuku district, Kitanakagusuku county, Okinawa-

寺田 千尋*・木下 光**

Chihiro TERADA*, Hikaru KINOSHITA**

Purposes of this study are to clarify how to develop residents-led community building sustainably, by handling Ogusuku district. Conclusions of this study are following five. (1) Community building in Ogusuku district can be divided into three periods. Community activities changed from the intangible activity to tangible activity, and activity managements changed from inside circle of Ogusuku district to collaboration with outside groups. (2) It is important to make spontaneous organizations be activated and to give spontaneous organizations support by residents' association. (3) Residents' association accepts outside groups kindly into community building. (4) The community center has been utilized and been the hub place for community building. (5) Ogusuku district has not depended on the support by public administration.

Keywords: Okinawa, Ogusuku district, Residents participation, Residents' association, Small municipality, Community center

沖縄, 大城地区, 住民参加, 自治会, 小規模自治体, 公民館

1. 序

1-1. 研究の背景と目的

住民が積極的に参加する、住民主体のまちづくりが各地で展開している。しかし、特に小規模自治体において、そのまちづくりを持続させることには人口減少や少子高齢化の進行に伴う担い手不足、参加する住民の固定化や住民自治機能の低下によって、多くの困難が伴う。そのため、まちづくりの持続性が課題であり、住民の主体的な活動が継続し、発展するための条件を明らかにすることは重要であるといえる。また、住民主体のまちづくりを支援する方策や組織、取り組みに関する研究^{1) 2) 3)}、小規模自治体の総合計画作成時及び作成後の住民参加に関する研究⁴⁾はあるが、行政から自立した形で、自治会主体でまちづくりを行う地区を事例にした研究はない。

沖縄県大城地区は、小規模自治体でありながら住民主体のまちづくりが10年以上持続し、地域活動や参加者が増え続け、発展している地区である。そこで本研究では大城地区を対象とし、まちづくりの経緯・変遷を追うことで、大城地区の地域活動や組織がどのように形成され変化し、行政から自立した形で地域活動や参加者が増え続け、発展してきたのかを明らかにするとともに、小規模自治体において、住民主体となって持続的にまちづくりが展開される条件を明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の対象

大城地区は沖縄本島の中南東部、北中城村の13ある地区のうち最南端の標高100mの山頂に位置する。大城地区の北側の丘陵地は森になっており大城御嶽¹⁾といった聖地が存在する。森の麓にはいくつかの拝所がおかれ、さらにその下に住宅が広がるという沖縄の伝統的な集落形態を残す地区である。また地区にはカーと呼ばれる共同井戸が4箇

所あり、これらも信仰の対象となっている。住宅は木造からRC造の住宅に、敷地囲いは石垣と屋敷林の構成からブロック塀にほとんどが変わってしまったが⁵⁾、地区内に国指定重要文化財の中村家住宅、地区に隣接して世界遺産の中城城跡、国指定史跡の荻堂貝塚と、伝統的な文化財が残っており、隣地区の荻道地区と大城地区は古城周辺景観維持のためのバッファゾーンに位置づけられている。荻道地区とは同じ御嶽と拝所を信仰し、元々一つの集落であったとされ、両地区合同で行われる神事もある。大城地区の人口は394人⁶⁾で、北中城村で2番目に少ないが、住民主体のまちづくりは、沖縄県内外から評価、賞を受けている。

本研究では、住民がまちづくりに参加を始めた1994年⁷⁾からを対象に、大城地区の字史⁷⁾、各組織活動報告書^{14) 15) 17) 19) 21) 22)}、地域広報誌^{16) 18) 20)}、住民から提供して頂いた写真、ヒアリングをもとに分析を行う。

図1 沖縄本島及び北中城村における大城地区の位置

2. 地域活動を支える組織とその構成

2-1. 村に属する組織

大城自治会は任意加入によって、150世帯のうち約7割の102世帯が所属している。運営は自治会長1人、副自治会長3人、会計1人の三役と、理事、幹事の計18名で構成されている。自治会費は各世帯が月に約600円の会費を支払う他、村からの助成金や、大城地区の支援者、外部組織

* 正会員 東京都庁 (Tokyo Metropolitan Government)

** 正会員 関西大学環境都市工学部建築学科 准教授・博士 (工学)

(Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Environmental and Urban Engineering, Kansai Univ., Dr. Eng.)

からの寄付金で活動を行っている。村に属する自治会の下部組織として、老人会、婦人会、青年会、子ども育成会、向上会がある。老人会は地区に住む60歳以上の約半数、50人程が加入し、月2回の定期活動の他、自治会が主導する地域活動にも積極的に協力、参加をしている。

婦人会は既婚女性を中心に構成され、40代からの参加が多く年齢の上限はない。大城地区の既婚女性は地区外から嫁いできた人が多いため、交流を図る役割もある。北中城村主催の活動が年3回、村外の地域づくりの視察研修などが開かれており、自治会主催の地域活動では来訪者への仕出しや男性陣への差し入れなどを行う。住民が亡くなった際はその家に炊き出しをして届ける、伝統的な風習も行う。

青年会は高校を卒業した全員が会員となり、約20名が所属している。若者が減少しているため、大城地区民のみで構成されておらず、他地域に住む大城地区出身者や友人が地域活動時に参加して活動が行われる。定例会は行っており、沖縄の伝統芸能であるエイサーを行う時に練習で集められる。また地域活動時は、設営や物販の担当も行う。

子ども育成会は15歳までの住民とその親世代で構成される。学童保育だけでなく、餅つき大会や、島くとうばカルタ大会、ハロウィーンなど、同世代の交流の場をつくる企画の他、他地域との交流も行われている。

向上会は戦後直後に生活環境整備のために沖縄県下の各自治会にできた組織で、大城地区では村議員が慣例として代表を務めていたが、今は活動していない。

2-2. 自治会内の内発的につくられた組織

大城自治会には村に属する組織以外に、住民が自発的に結成した組織もある。まちづくりの過程で6組織が結成され、公民館建設委員会、まちづくり協議会はその役割⁽³⁾を終えてなくなったが、大城花咲翁会、ムーンライトコンサート実行委員会、スーヅグワ週末美術館実行委員会、公民館企画運営委員会の4組織が継続している。

大城花咲翁会は55歳以上の男性の25名で構成され⁽⁴⁾、1999年発足時から毎日、私有地だけでなく公道も含め、地区中にわたって緑化活動を行っている。2007年までは新しい地域活動を提案し、大城自治会と共催で運営も行っていたが、2008年以降は緑化活動のみに集中し、その他運営を自治会や下部組織に任せている。2012年からは、青年会や子ども育成会の会員が「花咲にいい会」と自称し、不定期に緑化活動を手伝い始めている。

ムーンライトコンサート実行委員会及びスーヅグワ週末美術館実行委員会は、それぞれ新しくできた地域活動を運営する委員会で、毎年自治会で役員と係が決められ、開催2ヵ月前から3、4回の会合、ワークショップをしながら準備を行っていく。会員は自治会役員を中心に35名程度で、スーヅグワ週末美術館実行委員会は地区住民に加え北中城村文化協会所属の芸術家2人を含めた構成となっている。

公民館企画運営委員会は、2003年公民館の改築を契機に、住民間での交流や教育がより活発に行われるよう、2010年大城自治会の役員会の中で発足され、下部組織推薦の5人（老人会、婦人会、青年会、子ども育成会、大城花咲翁会）

と自治会役員から1人、立候補の住民2人によって組織される。公民館を中心とした交流、教育活動や、各会の定例活動を連絡・報告する広報誌の作成を行い、平日の昼間はボランティア当番によって公民館を管理し開放している。

2-3. まちづくりを支援する外部組織

大城地区には、まちづくりを支援する2つの外部組織がある。沖縄県立芸術大学は、彫刻専攻部門が地区と共同事業を行い、陶芸専攻部門が住民と不定期ながらワークショップを開くことで、まちづくりの活性化を図っている。

北中城文化協会は芸術表現の場を村民に提供しており、広報誌で各地区の地域活動の紹介をしている。その陶芸部には村の芸術家が多数所属しており、ムーンライトコンサートでは演奏者として出演、スーヅグワ週末美術館では陶芸市やちんどん屋、区民作品づくりのワークショップを行い、大城地区の地域活動に運営側から参加している。

3. まちづくりの経緯と変遷

3-1. まちづくりの経緯と区分

大城地区のまちづくりを分析すると3つの時代に区分できる。時代ごとに活動の経緯を整理し、それぞれの変遷と特徴を論じる。1994年から1998年までを、行政と住民の協同によるまちづくりが行われた開墾期とし、1999年から2002年までを、住民主体でまちづくりを活性化させた萌芽期、2003年以降を、地区内の活動規模を集落外へ向けて拡大、発信し始めた成長期とする。表1に、大城地区のこれまでのまちづくりの経緯と受賞歴⁽²⁾を記す。

表1 大城地区のこれまでのまちづくりの経緯と受賞歴

	行政(北中城村)	大城自治会	大城花咲翁会
開墾期	1991 中城開墾歴史的環境ネットワーク構想・中城城跡公園計画策定		
	1994 古城周辺歴史的景観整備事業基本計画策定		
	大城・萩道を景観保全のバッファゾーンと位置づけ。行政、コンサルタント、地域住民で部会を作り、勉強会やワークショップを経て基本・実施計画を作成		
	1997 古城周辺歴史的景観整備事業実施計画策定		
萌芽期	1998 観光地修景緑化事業。村から自治会へラン提供	地域住民総出で県道沿いに8000本のランを植栽。以後、ランの維持、管理は住民によって行われる。	
	1998 事業工事着工。協同井戸、池、ミニ公園、石畳等		
	中城城跡 世界遺産推薦		
	1999 古城周辺歴史的景観整備事業基本計画策定		
成長期	2001 中城城跡 世界遺産登録	大城花咲翁会考案「大城地域づくり構想」自治会に提出、承認	大城花咲翁会発足
		ふるさとづくり賞」振興奨励賞	
		アガリヌカー竣工	
		ムーンライトコンサート第1回開催	
開墾期	2002	都市緑化功労賞	
		「花の観光地づくり大賞」努力賞	
	2003	大城公民館竣工	
		コミュニティ広場竣工	
		「沖縄ふるさと100選」に選定	
		「健康な地域づくりフォーラム」開催	
		スーヅグワ週末美術館第1回開催	
	2004	沖縄県立芸術大学との連携事業「彫刻カジマヤ計画」開始	
		第3回からムーンライトコンサートは規模を拡大し、会場はアガリヌカーから大城コミュニティ広場へ移す	
	2005	空き屋敷保全活用 CAF E喜友オープン	
		住民によるワークショップが喜友や公民館で活発に行われる	
開墾期	2005	「美しい日本の歩きたくなる道500選」に選定	
		「世界遺産のふるさとづくりシンポジウム」開催	
	2006	緑の愛護団体功労感謝状	
		沖縄県文化協会平成18年度団体賞	
	2007	琉球新報読者賞	
		「魅力ある地域づくりフォーラム」開催	
		沖縄タイムス社会貢献賞	
開墾期	2008	カジマヤ計画は自治会、沖縄県立芸術大学、北中城村文化協会、村教育委員会との連携事業になり、作品は大城地区から北中村へ設置箇所を拡大する	
		予算執行は大城花咲翁会から大城自治会へ移譲	
		祭事は自治会主催となる	
開墾期	2009	道路愛護団体功労感謝状	
		主要観光コース沿道花一杯事業地域公共景観賞	
開墾期	2009	松山市交流事業	
	2011	「住まいのまちなみコンクール」住まいのまちなみ賞受賞	

※：は受賞歴を示す。

3-2. 開墾期 (1994 年～1998 年)

1991 年、北中城村は荻道・大城地区を歴史的環境保全地区として位置づけ⁶⁾、1994 年より古城周辺歴史的景観整備事業を進める。本事業は両地区の住民の声ができるだけ反映されるように、村議員、コンサルタントに加え、両地区の区長、住民が参加するまちづくり協議会を発足させ、この会を中心に聞き取り調査や意見交換、現地調査を行うことで、幅広い年齢層の住民参加と意見の反映を図った。大城地区で住民が直接的に行政と協同してまちづくりに取り組む事となったのはこれが初めてである。本事業では歴史的景観を中心に検討し、基本計画から実施計画まで4年間、合意形成を図ってきた。まちづくり協議会で話し合われた問題点をもとに、事業化の優先度が検討され、実際に整備された箇所を図2に示す。公民館の建て替え、空き地の広場化、共同井戸の整備、通りの舗装が行われた。

1997 年には、北中城村は観光地修景緑化事業において、県の補助約 600 万円を得て荻道・大城地区にランの苗 8000 本を提供し、住民総出で植え付けが行われた。維持管理は住民が行い、行政と住民が協同して景観形成を行った。

図2 古城周辺歴史的景観整備事業による整備実施箇所

3-3. 萌芽期 (1999 年～2002 年)

1999 年に中城城跡が世界遺産登録に推薦されたことを受け、隣接する大城地区は北中城村と城跡の景観を維持するための古城周辺景観協定を結ぶ。強制力をもたない協定であったが、中城城跡や中村家住宅といった文化財を訪れる観光客に、文化財だけでなく地区内の景観を散策して楽しんでほしいという共通認識が住民の中で生まれ、地区の景観を実際に美化することを目的に同年発足したのが「大城花咲翁会」である。2001 年には大城地区のまちづくりの方針をまとめた「大城地域づくり構想」を大城自治会に提案し、承認された。任意組織であった大城花咲翁会は、当構想で、内発的な組織の中で公共事業の受け皿であった公民館建設委員会やまちづくり協議会とは異なる自主独立した下部組織となり、彼らの提案した「花と緑に囲まれた芸術の里づくり」というコンセプトを実現するためにまちづくりを積極的に行う。2002 年には「ムーンライトコンサート」という野外コンサートを提案し、大城自治会と共催して毎年行うことで、2012 年には全体で 37 人、その内、大城花咲翁会に所属していない住人からも 31 人が運営に参加する地域活動となり、広く住民が参加する地域活動を実

現した(表2)。また、2002 年から大城地区外から演奏者を集め、6 組が参加し、地区外との交流が始まった。

3-4. 成長期 (2003 年～)

2003 年、大城花咲翁会は「スージグワー週末美術館」という新しい地域活動を立ち上げ、大城地区外に住む人も運営側として 2 人が参加するようになった。同年に大城公民館が竣工し、住民が集まって地域活動を行える場所が出来たことで、スージグワー週末美術館では、外部から講師を 4 人招き、住人 60 人が参加する面シーサー作りのワークショップを開催するなど、公民館で新しい地域活動やワークショップが行われるようになった。また、ムーンライトコンサートと同様、2007 年まで大城自治会と共催し、2008 年以降は新たに運営委員会を自治会下部組織に設け、より多くの住民参加を図った。これらの地域活動は、古城周辺歴史的景観整備事業で整備された箇所で行われている⁶⁾(写真 1, 2⁷⁾)。また閉幕後は大城地区への活動の支援が増えるように、公民館前広場で地区外の来訪客と交流会を行ってきた。地域活動に協力する地区外の参加者は「大城応援団⁸⁾」と住民から呼ばれ、一員として継続的に参加するようになる。ムーンライトコンサートでは演奏者、スージグワー週末美術館では陶芸教室の講師として、毎年必ず参加して地域活動を支援する大城応援団もいる。

大城地区のコンセプトにある「花と緑」の景観は大城花咲翁会の緑化活動によって成果を生み始めていたが、「芸術の里」としての景観をつくるために、区民の有志が陶芸教室に通い、シーサー等の作品を道路沿いに展示したところ、活動に感銘を受けた芸術家⁸⁾や沖縄県立芸術大学から、2004 年より芸術作品を無償で提供されるようになった。2003 年に初めて大城花咲翁会はシンポジウム(表1、表2)を主催し、地区のまちづくりを宣伝した。2005 年からは空き家を改修してカフェにした「CAFE 喜友」(図2、表2)で住民がワークショップを開き、公民館に限らず他地域と交流する場が増えていった。2009 年には愛媛県松山市と交流事業を行い、沖縄県外まで交流が広がるなど、他地域との交流が増えた。また、公民館等の地域活動を行う場が増えたこと、新しい下部組織ができたことによって、住民はまちづくりに参画する機会が増えた。

また、賞を得るなど 2001 年から評価を受け始めた中で、外部から助成金や寄付金を受けるようになり、地域活動を継続していくための経費に運用してきた⁹⁾(表3)。

地域活動	参加人数と参加者内訳	備考
緑化活動	23人(大城花咲翁会のみ)	大城花咲翁会に所属する55歳以上の男性のみ参加。
ムーンライトコンサート(2012年)	運営37人(内、大城花咲翁会6人、大城花咲翁会以外の男性は21人、女性は10人)、演奏者32人(大城地区外のみ)	大城花咲翁会のみならず、男女問わず全世代が運営側として参加し、2012年は大城地区外から演奏者が32人参加する地域活動となっている。
スージグワー週末美術館(2012年)	運営36人(大城花咲翁会8人、大城花咲翁会以外の男性住民は15人、女性住民は11人、大城地区外からは2人)	大城地区の住民のみならず、大城地区外から運営側として2人が参加。
健康な地域づくりフォーラム(2003)・世界遺産のふもとづくりシンポジウム(2005)	参加人数不明。主催は大城花咲翁会。	大城地区外への活動の宣伝。
CAFE喜友でのワークショップ(2005～2008年)	参加人数不明。	大城地区のまちづくりを学ぶワークショップや、芸術作品展示、音楽ライブを主催し、地区外との交流の場となった。
松山市交流事業(2009年)	24人(内、大城地区民は11人、愛媛県松山市民は13人)	沖縄県外との交流。

表 2 大城地区民や外部からの参加を促した地域活動

写真 1 ムーンライトコンサート

写真 2 スーヅグワ週末美術館

4. 自治会を中心とする地域活動とその類型

4-1. 1 年間の活動

大城地区で行われている1年間の地域活動を、2011年の4月から2012年3月までを事例にとってみると、年間を通して24の地域活動が行われている事が分かった。これらの活動を内容別にみると、神事、清掃緑化、芸能文化教育、防犯広報、親睦の5つに分けられる。表4にこれらの地域活動をまとめる。なお、ここで取り上げる地域活動とは、

大城自治会に加盟する世帯に毎月配布される地域広報誌

表 3 助成・寄付・賞金とその運用

年	助成・寄付・賞金	金額	
2001～2003	北中城村役場	10万円/年	
2003～	中部市町村会	5万円/年	
2006	(財)沖縄ふるさと振興基金	※	
2008	沖縄タイムス社会貢献賞	10万円	
2011	「住まいのまちなみコンクール」 住まいのまちなみ賞(集落内サイン設置)	10万円	
年	助成・寄付・賞金	金額	運用
2003	(財)沖縄電力	5万円	ムーンライトコンサート
2004	ハウジング&コミュニティー財団	5万円	スーヅグワ週末美術館
	(財)沖縄電力	5万円	ムーンライトコンサート
	(財)南西地域産業活性化センター	3万円	ムーンライトコンサート・ スーヅグワ週末美術館
	(財)沖縄県電気保安協会	3万円	スーヅグワ週末美術館
2005	ハウジング&コミュニティー財団	20万円	世界遺産のふるさとづくり シンポジウム
	(財)沖縄電力	5万円	ムーンライトコンサート
	(財)沖縄ガス	3万円	ムーンライトコンサート
	(財)南西地域産業活性化センター	3万円	ムーンライトコンサート・ スーヅグワ週末美術館
	(財)コザしん地域振興基金	35万円	ムーンライトコンサート・ スーヅグワ週末美術館
	(財)沖縄県電気保安協会	3万円	スーヅグワ週末美術館
2006	(財)沖縄電力	5万円	ムーンライトコンサート
	(財)沖縄ガス	3万円	ムーンライトコンサート
	(財)南西地域産業活性化センター	3万円	ムーンライトコンサート・ スーヅグワ週末美術館
	(財)沖縄県文化振興会	※	スーヅグワ週末美術館
2007	(財)沖縄建設弘済会	50万円	ムーンライトコンサート・ スーヅグワ週末美術館
	(財)沖縄電力	5万円	ムーンライトコンサート
	(財)沖縄県対米請求権事業協会	20万円	魅力ある地域づくりフォーラム
※2006年(財)沖縄ふるさと振興基金、(財)沖縄県文化振興会による援助金額は不明。			

表 4 大城地区の1年間の地域活動

	番号	活動名称		活動主催	活動内容	活動場所	開催(実行)時期	
A 神事	1	ハチウビー(初御水)		自治会	水の恵みに感謝して巡る神事	地区内の拝所とカー(泉)4箇所	1月3日	
	2	綱引き		自治会	子ども達による綱引き	公民館前の通り	旧暦6月14日(7月下旬)	
	3	カウチーウンサク		自治会(荻道地区と合同)	新米収穫後に行われる感謝祭、豊年祈願	ノロ殿内火の神・喜友名根所火の神・久知屋根所・前喜友名を巡る	旧暦6月25日(8月上旬)	
	4	旗スガシー		自治会・青年会(荻道地区と合同)	五穀豊穡、集落の繁栄と無病息災を祈願。兄弟棒という棒術は、両地区の自治会と青年会で披露。	ノロ殿内火の神・喜友名根所火の神・久知屋根所を巡る	旧暦7月17日(8月下旬)	
B 清掃 緑化		地区清掃活動		自治会	大城花咲翁会が主導する清掃及び植樹・植栽活動。	地区全域	5月と12月の役員会後	
	5	植樹・植栽活動		大城花咲翁会	沿道、広場といった公共空間だけでなく、個人所有の庭までその対象とし、地区を「花と緑に囲まれた芸術の里」へと育むまちづくりコンセプトの根幹を支える。	県道、空き地を中心に地区全域	毎月第2・4日曜日	
	6			老人会 婦人会	大城花咲翁会が囃矢。	兄弟広場 公民館前花壇	毎月第2土曜日 毎月1回	
C 芸能 文化教育	7		盆踊り	自治会	樽を組んで行う盆踊り。踊りの練習、婦人会による着付け教室、盆踊り後は公民館で区民交流会有り。	公民館前広場	8月中旬	
	8	舞踊	青年エイサー	青年会	青年によって受け継がれる沖縄伝統芸能、北中城エイサー祭り。定例行事の他、結婚式やスーヅグワ週末美術館等ハレの日にも不定期開催。	地区内外	北中城エイサー祭りは8月中旬頃から9月上旬。スーヅグワ週末美術館は11月中旬。	
	9		道ズネー	青年会	お盆に地区内を練り歩く青年エイサーを指す。	地区内	8月中旬	
	10		彫刻・陶芸	彫刻カジマヤー計画	自治会・沖縄県立芸術大学	大城地区のまちづくりに賛同した沖縄県立芸術大学が教官や学生の彫刻作品(テラコッタ)を無償で寄付し、地区内や村内に設置する「花と緑に囲まれた芸術の里」の重要なプロジェクトの一つ。カジマヤーとは97歳のお祝いを意味し、10年間で97体の設置が目標。	地区全域及び北中城村内	2004年から
	11	シーサーワークショップ		自治会	区民に人気の地域活動で高齢者から子どもまで50人ほどが集い、2日間で漆喰シーサーを制作する。区民がつくったシーサーは集落の至る所に設置。瓦師による漆喰シーサーの展示、即売会も行われる。	公民館	ゴールデンウィーク2日間・2003年から	
	12	美術		スーヅグワ週末美術館	スーヅグワ週末美術館実行委員会	地区全体を美術館に見立てる村ごと美術館の活動。区民による展示、自宅庭を開放するオープンガーデン、やちむん市など多様な催し物が行われる。	公民館を中心に地区全域	11月第2週末2日間・2003年から
	13		集団制作		スーヅグワ週末美術館の区民展示に向けた区民による書道・絵画・面シーサー等の作品制作。地区外から講師を呼んでワークショップを行う場合有。	公民館	11月第2週末に開催されるスーヅグワ週末美術館前・2003年から	
	14	方言	うちなーぐち講座	サークル活動	沖縄方言が達者な地域住民が中心となり、琉歌や昔話を交え、うちなーぐち(方言)でゆんたく(おしゃべり)をする。地区内高齢者を対象として始めたが、方言を学びたい大学生や地区外に住む孫も参加。	公民館	隔週土曜日1時間・2010年から	
	15	音楽	ムーンライトコンサート	ムーンライトコンサート実行委員会	第一回はアガリヌカー庭園池のほとりで開催。2004年から現在の場所で行われる夏の夜の野外コンサート。観客は毎年500～700人に及ぶ。	コミュニティ広場	7月上旬・2002年から	
	16		大城古典音楽同好会(三線クラブ)	サークル活動	三線を習う活動。生年祝い等地域イベントで披露。三線が得意な地区内住民が講師となる。	公民館	月2回木曜日20時～・2002年から	
	17	伝統料理教室	ていんさぐぬ会	婦人会	地域伝統料理を伝える教室。65歳以上の女性が生活の知恵や大城の慣習を若い世代へ伝授する会。	公民館	不定期開催・2010年から	
	18	学童保育	ちむあぐみ塾	自治会	学童保育とともに、勉強をボランティアで教える。	公民館	2009年から	
	D 防犯 広報	19	防犯	大城夜警団	駐在所及び父親達を中心とする住民有志	集落をパトロールする夜間の防犯活動(2011年、地域安全への貢献が評価され、宜野湾署から感謝状)	地区全域	毎週火曜日21時～23時30分・2004年から
		20	広報	広報誌「わした島大城」	公民館企画運営委員会	自治会活動を中心に大城地区での地域活動の告知と呼びかけを行う。毎月、地区内でのニュース、イベント、自治会会合の報告が掲載。村の広報誌と共に各班班長によって各世帯に配布。	各世帯	毎月1回・2010年から
	E 親睦	21	居場所づくり	いきいきふれあい会	老人会	体操やゲームを行う高齢者の居場所づくり	公民館	毎月第2水曜日・1995年から
		22	お祝い	合同生年会	自治会	新生児、73歳、85歳になる区民対象。会費制で千円	公民館	1月第3日曜日
		23	スポーツ	区民ふれあいグランドゴルフ	自治会	高齢者と子どもを対象としたグランドゴルフ	公民館	2月中旬
		24	地域間交流	松山市交流事業	大城自治会・青年会・愛媛県松山市久米地区自治会	公民館が主体となる地域まちづくりを双方の子どもたちが学ぶ体験学習プログラム	公民館中心(開催地は1年毎交互)	年1回・2009年から

「北中城」および、年間6回ほど発行される大城広報誌「わした島大城」、大城自治会活動報告書で報告される活動を中心として、大城住民が周知でき、住民であれば誰でも参加可能(年齢制限のあるものも含む)である活動の事を指す。

4-2. 神事

4つの神事が伝統的に行われており、大城地区は萩道地区と元々1つの集落であったことから、カウチーウンサクと旗スガシーは萩道自治会と合同で行われている。また、地区住民のみで行い、大城地区外の人参加はない。

4-3. 清掃・緑化

大城地区では、大城自治会、大城花咲翁会、老人会、婦人会がエリアの担当と活動日を決めて、清掃・緑化活動を行っている(図3)。活動日以外にも、住民が毎日各自で、清掃や花の管理を行っている。大城花咲翁会は公道にも緑化活動を行っており、古木にランを着生させ、ブロック塀コンクリート擁壁、ガードレールに沿って設置し、赤瓦や琉球石灰岩で花壇を形成している箇所もある。緑化活動は、支援者から花などの物資や資金の援助がある。

大城地区にはガジュマルやリュウキュウマツといった大木がシンボルツリーとして点在している。しかし、整備事業によって根が傷つけられたことや、台風や虫害が原因で3本の大木を失うこととなった(図4⁽¹⁰⁾)。現在、大城花咲翁会によって新たに植樹されている所があり(図3)、まだ高さは十分ではないが、将来的には新たなシンボルツリーになるように植えられた。

図3 緑化・清掃箇所と植樹活動の現状

図4 シンボルツリーのあった箇所

4-4. 芸能・文化・教育

開墾期には伝統的な舞踊の地域活動しかなかったが、ムーンライトコンサートとスージグワー週末美術館という、

多くの来訪客⁽¹¹⁾がある2つの地域活動が始まり、現在まで住民主体で行われている。両地域活動は住民発案の実行委員会が各々主導し、大城自治会の全下部組織が設営や当日の運営を行っている。例えば、表2に示すように、2012年スージグワー週末美術館では実行委員会が36人で構成され、地区内34人と地区外2人が運営を行っている。スージグワー週末美術館はスージグワー(路地)も含めて地区中を美術館と見立てて行われる地域活動で、期間中2日間のみ住民の個人所有の庭を「オープンガーデン」として開放する。さらに、住民が日頃から趣味で行っている手芸、絵画、写真、花壇や盆栽を展示作品や、ワークショップを開いて集団制作された面シーサーや土器、書道作品を公民館で展示するなど、多くの住民参加によって開催が可能となっている(表5)。第1回と第10回のスージグワー週末美術館を比べると(表6)、オープンガーデンが11ヶ所から14ヶ所に拡大し、ワークショップが1回から3回に増えて、その内1回は住民が講師となって開かれており、住民の参画する機会が増えている。また、地区外の参加者がちんどん屋や陶芸市、バザー、新たなワークショップを開いており、地区外の芸術家や写真家の作品も展示され、大城応援団の参画する機会も増えている。

これらの活動以外にも、新しい公民館が整備されて以降、公民館を地域活動の場所にして、新しい芸能・文化・芸術活動が行われていった。また、持続的な活動としては、大城地区には彫刻やテラコッタ作品が設置されており、彫刻作品は芸術家によって寄贈されている。テラコッタ作品は沖縄県立芸術大学が大城花咲翁会からの依頼に賛同して、毎年学生によって制作された作品が無償で寄贈されている(写真3,4⁽¹²⁾)。「彫刻カジマヤー計画」という名で行われ、2004年からの10年計画で、2013年をもって1区切りを迎えた。2008年以降は作品展示エリアを拡大し、北中城村全域にわたって設置されている。芸術家と沖縄県立芸術大学の寄贈作品の分布をみると、初年度から広範囲に設置されており、初年度以降も設置数が拡大している(図5)。

表5 第10回スージグワー週末美術館における住民の役割と展示作品

役割(運営は計36人。役割を複数兼務している人もいる)	
運営	会場設営の手配 9人 住民の作品出展手配・住民の集団制作手配・地区外の作品出展手配 3人・7人・16人 物品販売係・広報係 16人・8人
役当	当日設営 大城花咲翁会・青年会・子ども育成会
割日	当日食品調理 婦人会
の	当日物品販売 大城花咲翁会・老人会・青年会
区民作品	
住民	花壇・盆栽・夏休み作品(子ども育成会)・伝統衣装・人形・手芸・絵画・写真
地区外	シーサー(北中城村文化協会陶芸部)・絵画展(中村家住宅)・写真(地区外の写真家)
共同制作	面シーサー(陶芸教室)・土器(陶芸教室)・書道(書道教室)

表6 スージグワー週末美術館の規模の拡大

	第1回(2003年)	第10回(2012年)
オープンガーデン	11ヶ所	14ヶ所
ワークショップ	・面シーサー作り (60人参加。地区外の参加者が講師。)	・陶芸教室(15人参加。地区外の参加者が講師。) ・書道教室(20人参加。住人が講師。) ・絵画ワークショップ(15人参加。地区外の参加者が講師。)
バザー	婦人会が実施	婦人会、青年会、花咲翁会が実施
その他企画	・区民作品展 ・コンサート (住民及び地区外の参加者が実施)	・区民作品展 ・コンサート(住民及び地区外の参加者が実施) ・陶芸市(北中城文化協会が実施) ・ちんどん屋(地区外の参加者3人が実施) ・写真展示(地区外の写真家が参加) ・沖縄県立芸術大学の彫刻設置

写真3.4 芸術作品の設置風景

図5 芸術作品の分布図

4-5. 防犯・広報

大城地区では、駐在だけに頼らずに住民も一緒になって巡回する「大城夜警団」や、大城地区の地域活動の参加を促すために、地域広報誌「わたした大城」の配布といった、定期的な防犯・広報活動も住民主体で行われている。

4-6. 親睦

伝統的に行われている「合同生年会」の他、同世代、異世代の交流の場を設けている。また、他地域との交流として、愛媛県松山市久米地区自治会と共催で、子どもが両地区を交互に訪問、滞在する「松山交流事業」を行い始めた。

4-7. 地域活動の種類

(1) 公民館での地域活動の種類

2011 年度に大城地区民の地域活動の場所をみると、全267回の活動のうち168回を公民館で活動しており、約6割が公民館で行われていることが分かった(図6)。公民館での地域活動の内容をみると、芸能分野と学習塾が多くを占めている。また、公民館での地域活動の開始時期をみると、成長期に始まった地域活動が最も多く、開墾期が最も少ないことが分かった。芸能分野を中心に、開墾期から成長期までに地域活動の増加が活発化したことがいえる。

(2) 活動領域からみる地域活動の種類

2011 年度の地域活動を、活動領域から類型化した⁽¹³⁾(図7)。縦軸は主催組織と活動参加者について類型化を行い、横軸は活動成果が有形・無形のどちらであるか、時間軸でみると1年間に定期的に行われるか、一時的なものか、恒久的なものかで類型化した。

開墾期に行われていた活動は外部組織の介入は少なく、大城地区内の組織で執り行われており、伝統行事などの無形の活動が多かったことが分かる。萌芽期に入ると恒久的に行われる緑化・清掃活動が始められ、地区の景観を意識

した有形の地域活動が行われるようになった。ムーンライトコンサートでは地区外部の人間が活動に関わるようになってきた。成長期に入ると、スーパージュア週末美術館、彫刻カジマヤー計画や、松山市の交流事業など、様々な外部組織が大城のまちづくりに運営側から携わっていくようになっていった。成長期に初めて、有形で恒久的な活動が行われたこともわかる。このように、住民主体のまちづくりが始まった開墾期に比べて、地域活動の性質が変化していることがわかる。

図6 公民館での地域活動の種類

縦軸評価指標		
主催	a. 大城内部	b. 大城主導+他団体支援
参加	A. 大城地区民	B. 大城地区民+村民
※ 狭道地区との合同の神事は、かつて1つの集落であったため、aの内部活動として評価することとする		
横軸評価指標		
形態	あ. 無形・コミュニティ	い. 衣裳・道具・舞台等装置
時間軸	ア. 一時的	イ. 定期的
無形・一時的 有形・恒久的		
1 2 3 4 5 6 7 8 9		
内部組織単独		
1 a × A	× 合同生年会 × ハチマキ × 三線クラブ × いきいきふれあい会 × ふれあいランドゴルフ	× 盆踊り × 通スネー × 旗スガシー
2 a × B	× カウチーウンサク ▼ うちなーぐち講座	
3 a × C		
4 b × A	▼ ちむあぐみ塾	▼ 集団制作
5 b × B	▼ 大城夜警団	× 青年エイサー
6 b × C		● ムーンライトコンサート
7 c × A		▼ スーパージュア週末美術館
8 c × B		
9 c × C	▼ 松山市交流事業	▼ 彫刻カジマヤー計画
外部組織協働		
×: 開墾期 (1994～1999年) ●: 萌芽期 (1999～2004年) ▼: 成長期 (2004～2012年)		

図7 活動領域からみる地域活動の種類

4-8. 地域活動を支える構成

図8に大城地区のまちづくりに関わる組織の構成を示す。大城自治会は、住民主体のまちづくりが始まる以前から元来あった自治会下部組織にあらゆる年代の住人が加入できるようになっており、それぞれが独自に地域活動を行う一方、自治会主催の地域活動時には各会が役割を分担して参加する。その後、まちづくりの過程で内発的に活動組織が結成され、新しい地域活動を提案・主催し、まちづくりが活性化してきた。大城自治会及び下部組織の活動を、大城地区外の組織が支援し始め、地域活動を支えている。

図8 大城地区のまちづくりの組織構成

5. まとめ

5-1. 結論

(1) 大城地区の地域活動の展開

大城の地域活動の特徴として、開墾期、萌芽期、成長期という3つの時代区分が可能である。地域活動は、無形の活動である神事が大城自治会の内部組織で行われ、地区内の公共空間を活用するという意味で有形の活動へ、内部組織で運営されていたものが徐々に外部組織と協働する形になって展開してきた。誰もができる清掃・緑化活動や、金銭的負担のない神事・親睦活動といった身近にできることから始めていくことで、行政が企画しなくてもまちづくりを始めていくことができた。特に緑化活動という、身近にでき、かつ目に見える形で効果が出る活動を行うことで、住民のまちづくりに対するモチベーションが持続された。

(2) 内発的組織の活性化

小規模な住民の任意組織であった大城花咲会が自治会下部組織に加入し、活動が正当化されることで、新しい地域活動を提案、運営、緑化活動の継続が可能となった。その代表例が、ムーンライトコンサートやスーパージグソー週末美術館である。このような大城花咲会の主導する地域活動には、村に属する既存の下部組織も積極的に参加し、組織内の活動も活発化し、その実行・運営のためだけに、実行員会という内発的な新しい下部組織がつけられるなど、大城地区のまちづくりは、大城自治会の内部組織の発展と共に展開していった事が分かった。その結果、下部組織が行う地域活動を大城自治会が支援するという形で、まちづくりが進められてきた。

(3) まちづくりに参画する個人や外部組織の許容

大城自治会は、他地域の自治会でみられるような一般的活動の他に、大城花咲会の提案する新しい地域活動を共催して行ったり、その他運営委員会の構成に北中城文化協会所属の作家が参加することの是非を判断したりするといった役割を有している。また、大城花咲会が地区のまち

づくりを行えるように自治会の下部組織に取り込んでいったことに代表されるように、まちづくりを行う住民による新たな組織づくりとその任意組織を正当化することが重要である。そして、住民が参加する受け皿として様々な分野の組織がつくられ、花が好きな人は大城花咲会、造形が好きな人はスーパージグソー週末美術館実行委員会というように、各々が得意とする組織にのみ参加し、全ての組織に参加しなくてはならないという強制力がないことで、住民が参加しやすいという意味での垣根の低さを担保している。

さらに、スーパージグソー週末美術館において運営側に地区外の参加者を受け入れたり、地区外の参加者の企画の実施を積極的に許可したりするなど、地区外の個人や組織も参加しやすいという垣根の低さを有している。大城地区のまちづくりに参画する住民と外部に対する2つの垣根の低さが、大城地区のまちづくりの特徴といえる。

(4) まちづくりの拠点

大城地区で新たに始まった地域活動は、古城周辺景観整備事業で整備された箇所を使って行われている。特に公民館がよく利用されていて、2011年度でみると、約6割、168回の地域活動が行われ、まちづくりの拠点となっている。公民館が整備されて以降、芸能・文化・教育の地域活動が公民館で新しく行われるようになり、大城地区内の交流だけでなく、地区外の人達との交流も行われていった。

(5) 住民主体のまちづくりが持続的に展開される条件

大城地区で行われている地域活動は、予算面においてはほとんどが行政からの支援ではなく、各種組織からの助成や寄付を運用することで継続が可能になっている。また、行政から人的支援を一切受けておらず、ムーンライトコンサートやスーパージグソー週末美術館に代表されるように、住民と地区外の参加者によって活動規模が拡大している。このように、住民主体で持続的にまちづくりが展開されるのは、本章(1)から(4)で述べた、誰もが参加可能な活動から始めること、下部組織を発展させること、住民や外部の参加に対して垣根が低いこと、まちづくりの拠点があることに加えて、予算面における外部からの助成と支援、地区内外の人的支援が条件になっている。

5-2. 考察

(1) 大城地区のまちづくりの普遍性

大城地区は、多くの地域活動を行い、来場者の多い地域活動を運営するなど、小規模自治体にもかかわらず、住民や外部組織と協同していくことでまちづくりを維持、展開させている。大城地区における、初の地区外との協同によって企画されたまちづくりは、芸術家及び沖縄県立芸術大学が、大城自治会の行っている清掃・緑化活動を見て感銘を受け、「花と緑に囲まれた芸術の里づくり」というコンセプトに賛同し、テラコッタ作品の寄贈を始めたことである。土地の所有や私有地・公有地の境界を超えて地域の清掃・緑化活動を継続的にを行い、緑化された場所にテラコッタ作品が設置されていくという「花と緑に囲まれた芸術の里づくり」というまちづくりのコンセプトが具現化され、発展

していったといえる。そして、芸術分野の講師を招きワークショップを開催することで、まちづくりのコンセプトが多くの住民に共有されるようになった。さらに、地区外からの参加者に対して大城応援団という呼称を用いその役割を位置づけたことで、地区外からの参加者にとって大城応援団に所属しているという意識の醸成につながり、継続的に参加しやすい環境になっているということがいえる。日本全国の地区に存在する自治会活動でも、このように清掃・緑化活動を土台として、住民と外部組織が参加する垣根を低くし、公民館をまちづくりの拠点として内発的組織の誕生と活性化を図り、それを自治会が支援することで地域固有のまちづくりが可能であるといえる。

(2) 景観の再構築

大城地区の地域活動が、無形のものだけでなく、有形のものへ発展し、そして公共空間における芸術作品の展示やシンボルツリーの植え直しにみられるような緑化活動というまちなみを包含する多様性を展開してきた。当初は55歳以上の男性が中心となって緑化活動が行われていたが、55歳未満の世代も「花咲にいいい会」と称して、組織化して緑化活動に取り組もうとしている。これによって子ども育成会、青年会から大城花咲会へと切れ目なく世代がつながった。このことは、戦後景観が大きく変わった沖縄県大城地区において、景観の再構築が世代を超えて取り組まれていること、次の世代が主体性を持ってまちづくりへ参加することを促すことができるのではないかと考えられる。

(3) 今後の課題

本研究において、公民館における地域活動資料として得られたのは、2011年度のみであった。今後、まちづくり活動の展開と公民館における地域活動の関係性を論じるためには、年単位でどのように公民館における地域活動が推移しているかを把握・分析する必要がある。

【謝辞】

本研究にあたり大城自治会会長の外間清子さん、副会長の仲村有子さん、前自治会長の小藪裕延さん、大城花咲会会長の外間裕さん、大城地区の皆様には多大なるご理解とご協力を頂きました。心より謝意を表します。

【注釈】

- (1) 御嶽は沖縄で神々が下ってくる神聖な場所とされる。
- (2) 2011年統計時。
- (3) 公民館建設委員会は2001年、大城公民館建設に向けた調査及び準備を行うことを目的に発足し、公民館が竣工した2003年、大城公民館落成記念誌を発行して解散した。まちづくり協議会は古城周辺景観整備事業の、1994年の基本計画時に発足し、1997年の実施計画策定時に役割を終え、解散した。
- (4) 女性は婦人会活動や、地区内での交流が多い反面、男性は家に引っ込みがちで、定年退職後は地区内での交流の場が少なかったことから、55歳以上の男性に限定して、生きがいづくりも結成目的のひとつになっている。
- (5) 中城村と北中城村による「中城間切歴史的環境ネットワーク構想・中城城跡公園計画」で大城地区は「大城グスクと荻道周辺」というエリアに指定された。
- (6) ムーンライトコンサートは、初期はアガリヌカー、現在はコミュニティー広場で、スージグワー週末美術館は大城公民館や個人所有の庭、路地で行われている。

- (7) 大城地区在住の新垣正良氏より提供。
- (8) 首里城正殿の赤瓦の復元を行った瓦職人・水墨画家である奥原崇典氏(2014年逝去)が大城応援団の第1号である。
- (9) 大城花咲会の主要会員は国や北中城村の元職員であり、第1回スージグワー週末美術館は、北中城村の地域保険事業費20万円を得て実施に至ったが、第2回以降は外部助成金や寄付金を運用して実施する等、行政から出来るだけ人手や金銭的補助を得ないような形で地域活動を継続させてきた。
- (10) 大城地区在住の小藪裕延氏より提供の写真を加工。
- (11) ムーンライトコンサートは毎年約600人、スージグワー週末美術館は約2000人の来訪客がある。
- (12) 大城地区在住の外間裕氏より提供。
- (13) 合同生年会、区民ふれあいゴルフが始まった年代が不明であるが、大城地区在住の新垣正良氏より提供してもらった写真に、1998年の活動写真があったことから、開塾期または開塾期以前の活動とする。

【参考文献】

- 1) 田中晃代他(1999)、「住民主体のまちづくりプロセスの体系化とまちづくりの段階別」にみた支援方策のあり方に関する考察-豊中駅前地区まちづくりを事例として-、都市計画論文集No.34, pp.319-324
- 2) 葉袋奈美子他(1995)、「住民主体のまちづくりへの自治体及び外郭団体による支援の現状と課題」、都市計画論文集No.30, pp.331-336
- 3) 吉積巳貴(2013)、「持続可能な地域づくりのための住民主体型環境まちづくりに関する一考察-西宮エココミュニティ事業を事例に-」、都市計画論文集No.48, pp.831-836
- 4) 山崎亮他(2010)、「小規模自治体の総合的な計画づくりにおける住民参加プロセスに関する研究-島根県海士町の第四次総合振興計画づくりを事例に-」、都市計画論文集No.45-3, pp.91-96
- 5) 寺田千尋他(2015)、「敷地囲いの変遷を通してみる沖縄県北中城村大城地区の住民主体の景観形成評価に関する研究」、日本建築学会計画系論文集, Vol.80, No.708, pp.369-378
- 6) 宋曉品他(2010)、「『琉球遺産群』のバッファゾーン及びその周辺地域における景観形成と保全について-首里城跡、中城城跡、斎場御嶽を事例として-」、日本建築学会計画系論文集, Vol.75, No.652, pp.1463-1470
- 7) 仲村榮春(1980)、「大城の今昔」
- 8) 北中城村(1986)、「立村40周年記念誌 北中城」
- 9) 中城村・北中城村(1991)、「中城間切歴史的環境ネットワーク構想・中城城跡公園基本計画」
- 10) 遠藤主治(1993)、「北中城村の民話」、北中城村教育委員会
- 11) 北中城村役場企画課(1995)、「古城周辺歴史的景観整備基本計画報告書」
- 12) 北中城村役場企画課(1998)、「古城周辺歴史的景観整備実施計画書」
- 13) 北中城村(1999)、「古城周辺景観協定」
- 14) 大城花咲会(2001)、「花と緑に囲まれた芸術の里づくり」
- 15) 大城公民館建設委員会(2003)、「大城公民館落成記念誌」、大城自治会
- 16) 北中城村(2008~2012)、「公報 北中城」
- 17) 荻道・大城勇水群活性化実行委員会(2010)、「森へ続く地域づくり」
- 18) 公民館企画運営委員会(2010~2012)、「わした島大城」
- 19) 沖縄県立芸術大学(2011)、「平成22年度『沖縄県立芸術大学教育研究支援資金』採択事業 地域連携による実践的芸術教育-大学と地域の交流プログラム-」
- 20) 花崎為継(2007~2011)、「しま、北中城文化協会」
- 21) 大城自治会(2011)、「大城自治会 活動報告書」
- 22) 大城花咲会(2014)、「花咲会表彰歴」

(2015年7月14日 受付)